

s t i l l . . . . .



あれっ。これ、マジあり得ねえ。

俺は目を見張った。動かした本棚の裏から現れた物体は、ちょうど一年前、失くしたと大騒ぎした携帯だった。

家中ひっくり返して探し回った。が、バイブ設定にしてあった端末は音も鳴らせず、見つけ出せない。もしや出先で落としたりしたのか、下手したら悪用されるかもしれない、と頭を抱えたものだ。

結局、次の日に新しい機種を買い換えたのだった。失くした携帯も買ってまだ半月ほどだったので、とんだ出費。それが一年前。

こんなところに落ちていたとは。見つからないはずだわ。俺は埃まみれの哀れな端末を見下ろした。やがて、ある好奇心がふと湧いた。



これ、まだ動くよな。使えないのは通信機能だけ。それ以外は失った時のままのはず。

今使っている充電コードと繋いでみた。電源を入れると、やはりぴかぴかと端末が輝き出した。一年の眠りを覚まされたのだ。

程なくして、ディスプレイが覚えのあるデザインになった。懐かしい。データフォルダには、一年前にこの携帯で撮った、いつもつるんでる幼なじみたちの写真がある。やっぱりアホヅうだ。俺は笑った。

メール機能も開いてみた。そして未読のメールが数件あることに気付く。

「……あっ、なるほど」

そうか。失くしてからこの携帯の回線を止めるまでに、少なくとも一日はあった。その間に受信したメールが、ここに閉じ込められたままなのだ。

「これ面白え」



俺は受信フォルダを開いた。見ることもなく一年眠っていたメールは四件。レンタル店のDMと、写真にもあった幼なじみ、タロとプウからの雑談メール。

そして、もう一件は。

スクロールしていた俺の指が止まった。

浮かんでいたのは、あいつの名前だった。

俺は驚きに震える指先で、メールを開いた。

「ごめんね。いつものところで、待ってる。  
ずっと待ってる。」

「……」

ごめんという言葉が目を打つ。

こんな。俺は膝立ちの姿勢のまま、携帯を見つめていた。こんな。こんなことって。





はっとメールの日付を見た。そして目を見張った。

日付は、今日だった。

とっさに立ち上がった。これは一年前だ。分かってるのに、部屋を出て、階段を駆け下りる。オカンの「部屋の片付け済んだのっ？」という金切り声を背に、家を飛び出した。

走った。「いつものところ」。分かってる。

中学時代、下校時にいつも通った土手だ。あいつは鉄橋の上を走る電車を見るのが好きだった。車体が夕陽に照らされると、宝物を見つけたみたい嬉んだ。

この携帯を失った頃、俺とあいつは喧嘩を繰り返してばかりいた。高校がばらばらになった俺たちは、すれ違いから傷つけ合うことに疲れ果て、結局、離れた。

そう思っていた。今の、今まで。俺は走りながら叫びそうになった。こんなの、ありがよ！



このちっぽけな端末を見失った、そのわずかな間に、俺はあいつまで見失ったんだ！

住宅街の路地を飛び出した。川へ向かう、通称心臓破りの坂を駆け下りる。

その時だ。俺を背後から呼ぶ声がした。走りながら振り向くと、自転車にそれぞれ乗ったタロとムウだった。腐れ縁の、幼なじみ。

「何焦ってんの」

走る俺に二人が横づけする。両側を自転車二台に挟まれ、俺はそれでも走り続けた。

「か、川」

「は？」

「川、行かぬえと。土手、土手っ」

二人が顔を見合わせたのが分かった。が、俺は構っていらぬない。もうすぐ陽が沈む。それまでに行かないと。なぜかそう思っていた。

「んじゃ、乗れよ」

するとタロが言った。俺は彼を見た。

「後ろ。そのほうが早い」



タロが俺を真っ直ぐ見る。俺もしばし彼を見返して、すぐに減速した彼の自転車の荷台に跨った。

「つかまってる！」

叫んだタロの声が風にさらわれた。隣を走るムラも加速させてペダルを踏み込む。俺たちは一瞬で、風になった。

陽が暮れかけている。

坂を下り切ると、川に沿った道に出る。ガードレールギリギリに寄せて自転車を飛ばしながら、タロが叫んだ。

「どこ行くんだ？」

「橋とこ！ 東横線の、橋！」

タロもムラも、なんでと聞かない。俺はタロの腰に両手を回し、ぐっと彼のシャツを掴んだ。夕陽に土手の草が光ってる。俺は目を閉じた。夕陽が落ちるのを、止めたかった。

あいつはシグナルを発したのに。ごめんって。あの気が強くて、絶対に謝ることをしなかったあいつが。それなのに。それなのに！

「橋！」





ムラが叫んだ。俺ははっと顔を上げる。目の前に鉄橋が見えてきた。きらきら輝く川面の上を、金色の光に縁取られた電車が音をたてて行き過ぎる。

「……」

何一つ変わらない光景。俺はタロのシャツを握りしめた。それを合図に、タロが自転車を停めた。後ろを走ってきたムラも一緒に停まる。三人同時に、土手上的の道に下り立った。

俺は無言で土手を駆け下りた。二人も付いてくる。もちろん、どこにも彼女の姿はない。

「……」

陽が暮れ行く川を見ながら、立ち尽くした。

「あれっ。おーい」

すると遠くから、俺らを呼ぶ声がした。見ると、同じく幼馴染みのバンとプウが並んで土手を歩いてくる。おそらく部活帰りなのだ。

「何やってんの」

二人が近付いてくる。電車が警笛を鳴らしながら、鉄橋の上を走り抜けた。





「……」

夕陽と。道路と。電車と。橋と。川と。トモダチと。何一つ変わらない。息を吹き返してしまった言葉以外。

あいつは、一年前の今日、たった一人でこの夕陽を見たのだろうか。

がくりとその場にうずくまってしまった。涙が溢れてきた。あとからあとから。加わった二人が、驚いているのが分かる。

一年前に時間を戻してと。  
本気で思ってしまう自分が嫌だ。  
ヤワ過ぎて、嫌だ。



俺を囲み、四人が口々に言い合う。

「なっ、何何、どうしたの？」

「うーん。まあほら。青春だから」

「青春だから。こればかりは。致し方ない」

「きっと夕陽がね、目に沁みるんだよ」

「マキロンですな先生！」

「あー上手いこと言うね！　きうなんだよ、

青春はマキロンなのだ」

「子供用は沁まないよ！」

「……意味分かんねーよ」

光が終息に向かう。今日が終わる。

それでもみんな、ここにいた。

この言葉は、今でも君の中に残ってる？

俺も言うよ。

——ごめんね。



(了)